

ポスト田中は誰か

韓国の歴史を中心に、北東アジアにおける日中韓三国の近世以降について非常に専門的な研究を継続したのが、崔書勉の東京韓国研究院だった。一九七五（昭和五十）年春、五年間住み慣れた東京都港区狸穴から三田に引っ越した。新たな研究院舎は五階建て、鉄筋コンクリートの頑丈な建物。どの階も大きなガラス張りがほどこされ、明るくどっしりと落ち着いてみえた。

これまでに「アジアの将来を考える九カ国共同委員会東京総会」「在日外国人教師会総会」「ソウルペンクラブ大会」「第一次国際韓国研究機関協議会」、シンポジウム「韓国にとって日本とは何か」、ゼミナール「日韓条約二〇周年記念」、講演会「日本への直言―新樹会主催」などで主役を演じてきた崔書勉の日本人士、外国要人との交誼は広がり、深まりをみせ、政治家では岸信介、佐藤栄作、福田赳夫、坂田道太、椎名悦三郎、船田中、三木武夫、秦野章らが彼に信をおいた。フォード大統領訪韓と朴大統領との会談内容を椎名に寄せたのは崔書勉である。仲立ちした人物が産経新聞社政治記者藤田義郎だ。北朝鮮の韓国浸透の実態を見て米国は対韓政策を転換し、朴政権への全面支持を約束したのだった。

崔書勉がいつも大韓民国に良かれと信じて働く行動規範は韓国人として当然の愛国精神に基づいていよう。この意味では私が陸英修殺害事件取材から戻り、佐藤栄作前首相の指示もあって木村俊夫外相に直接電話で「韓国、北朝鮮への等距離・二元外交は誤り。現政権にあらぬ疑いを抱かせる愚策」と指摘した行動と全く同じことだったと言える。木村外相は南北両政権をクロス承認し、国連加盟を推進するという構想を語ったのだが、韓国政府から真意を問いたいとする反応が強かった。当時日本外務省は四百万ドルの輸銀資金を使って北朝鮮を援助する意向だったという。これらの援助資金が軍事費に回される恐れを明らかにしたのは崔書勉と私だけであった。

藤田と同じく産経新聞社に在籍していた林建彦記者（後の東海大学教授）は「北朝鮮と南朝鮮」について記事を仕立てた思い出がある。掲載された後のことだが、鳴り渡る電話器をとりあげた。相手は一息に伝えたい行事を話した。「韓国研究院の崔書勉です。あなたの記事を興味深く読みました。研究院主宰のパーティーにお招きします。出席しませんか」

直裁な、有無を言わせない響きの誘い電話だった。全く面識もなかった人物から受けた不意の申し出だった。国際文化会館に顔を出した林は参加者の多彩な顔ぶれに目を見張る。

二度目に林が崔院長を訪ねた場所が新装なった東京・三田の新館だった。二十万点の収集資料が初めて公開された記念パーティーに出席したのだ。地下と二階書庫、展示室までとところ狭しと収納された朝鮮・韓国の近・現代関係図書、記録、地図の山に林は息を呑んだ。

「崔院長のすぐれた歴史家としての資質は、ダイナミックな直観力と人並みはずれた行動力に由来している」  
林の言である。林は金山国際関係共同研究所所長にすすめられ、月刊研究誌「北朝鮮研究」の責任編集者を引き受けている。

調査報道 (investigative reporting) という取材手法が本格的に日本に導入された時期はまさしく田中角栄首相時代の七四年暮れと言える。新聞記者が血を流して掌中に収めたのではない。立花隆と児玉隆也が文藝春秋本誌でやってのけた事実資料収集と分析が田中を足蹴りにした武器だった。田中の退陣は金脈問題をかかせないと判断したからそうだった。その意味が判明するのは二年後、一九七六年二月五日、米上院多国籍企業小委員会の模様を伝えるニュースが政界の黒幕児玉誉士夫によるロッキード社からの巨額工作資金受領を暴露したときだった。新聞記者は米証券取引委員会 (SEC) 提供のロッキード事件関連英文資料集を読み、分析し、取材対象を絞り込んでいく過程でようやく調査報道という分野の手法を身につけていった。

米国ではウォーターゲート事件を追及し、現職大統領ニクソンを失脚に追い込んだワシントン・ポスト紙の二記

者がハシリであり、次第に記者の独壇場としての場を確立するのである。

韓国では日本政治の動向は彼らの舵取りに大きく響く。いちはやく田中の後継者を特定し対処策を練っておく必要がある。朴大統領は近々離任する駐韓米大使シュナイダーをゴルフに招いて取材した。かつて駐日米大使館一等書記官だったシュナイダーは言下に「福田赳夫だ」と答えた。KCIA情報も、自国の駐日大使からも「次の首相は福田」という見解が青瓦台にあがっていた。しかし朴大統領には全く別の筋から至急電が入る。それは驚くべき内容であり、大多数の予想と全く異なる見解を述べていた。

「次の首相には三木武夫がなる。福田が首相になれば（韓国）に良くて、三木がなれば悪いというような社説が韓国で流布されないようあらかじめ防いでおく必要がある」

特別注文付きの知らせだった。

「大使、三木が首相になるかもしれないので、一度お調べください。政治というものはわからんものですからね」  
含みを持たせて朴大統領は注意喚起をシュナイダーに与えた。

二日後、韓国各紙は三木武夫が次期後継首相になったと報道した。中央情報部や駐日大使の面目は丸つぶれだった。驚いたのはシュナイダー大使である。

「やあ、朴大統領はいまの世には珍しく先見の明がある」

激賞したものである。大統領の鼻は当然高い。至急電報を送ったのは在東京の崔書勉だった。朴は崔書勉に大統領府青瓦台に来るようにと招待状を送った。

「崔院長、あなたのおかげで私は体面が保てたのだが、どうして速く、適確に知りえたのか」

「大統領、私は政治家でもなければ評論家でもありません。ただ、私には良い友だちがおります。産経新聞社政治部出身の政治評論家で藤田義郎といいます」

日本列島改造という華のある目標から転落した原因は田中角栄の金脈問題だった。七夕投票となった参院選で自民

党が獲得した議席は六十六議席にとどまった。福田赳夫、三木武夫は田中の「金権選挙」を公然と批判し、三木は閣僚を辞任、さらに福田も退陣した。自民党の挙党体制はこれで崩壊した。与野党伯仲となった参院の新たな構成自体が台風の目ともなり、暗雲は不気味に厚さを増してきた。

政局を乗り切るには田中退陣しかない。副総裁椎名悦三郎の判断は前尾繁三郎、河野謙三、灘尾弘吉、保利茂ら党長老らの共通認識ともなっていた。今後の政治の舵取りを誰に任せるか。田中の後継者選びは自民党副総裁椎名悦三郎に任されたのだった。福田赳夫、三木武夫、中曾根康弘、大平正芳の四人から彼は三木を対象に選考を進めた。これを世に椎名裁定と呼ぶ。本来椎名の胸中に宿っていた次期首相候補は保利茂だったという。意中の人を最終的に引っ込め、椎名は親しくしている藤田義郎を都内のコリアンハウスに呼び、会合。その場で椎名は裁定文執筆を藤田に頼んだ。韓国料亭で会ったのは日本語が通じない場所で秘密保持が可能とされたからだ。これほど確かな情報源はあるまい。椎名と藤田は韓国の受け止め方についても分析した。福田ならタカ派だから結構、三木はハト派だから良くない。このような単純な図式がまかり通るのを防ぐ必要がある、と。

椎名と別れた足で崔書勉を訪ね、三木に決定の情報を提供する代わりに、崔書勉を通じて意を通す。やはり藤田は百戦錬磨の政治記者だった。崔は直ちにソウル在の陸寅修に電報を打ち、これが青瓦台に届けられたのだった。一連の事情と経緯を知った大統領は崔書勉にこう言った。

#### 大統領の希望で紹介

「良い友は院長だけが知っているのではなくて、私にも紹介してくれないか」

大統領の希望を聞いた崔書勉はその後、藤田義郎、木内信胤、村松剛、大統領の蓄膿手術を手がけた足川雄一（東京厚生年金病院耳鼻咽喉科部長）ら知人を紹介していく。

大正十一（一九二二）年生まれの藤田義郎が崔書勉と交際を始めたのは一九七二年ホテル・オークラで出会ったと

きからだ。椎名裁定について藤田が書いた記事によれば、一九七四年十二月一日日曜日、自民党本部総裁室に三木、福田、大平、中曽根を呼び集め「後継総裁に三木武夫君」と一方的に断を下した。傍流の最小派閥で、せいぜい刺身のツマくらいにしか見られていなかった三木だけに、指名された三木本人が「青天の霹靂」と絶句した。それに先立つ十一月二十九日、藤田は崔書勉に次期総裁は三木と告げたことになる。裁定が下った日の夜、藤田は崔書勉と連れ立って三木武夫を私邸に訪ねている。次に藤田が崔に伴われて、村松剛筑波大教授、金山政英、小谷京都産業大教授らと青瓦台での夕食会に招かれたのは同じ十二月十六日だった。

藤田は「安重根像を一変させた。毀誉褒貶にとんちやくせず、内に経綸を包み、外に心気浩然、雷同せず孤高を守り、附和を欲せず他を追従せしめるに俠氣横溢、その言行一致せざるはない。所詮学者の枠には収まりえない偉物である」と漢文調で崔書勉を描いた。

足川医博は治療成功にあたって非公式な招待状を受けていたが、朴が金載圭中央情報部長によって七九年十月二十一日射殺されたため納棺された国立墓地にぬかずいた。以降、足川は毎年国立墓地への墓参を欠かさなかった。

#### マイクロフィルム

研究院に保存された文書類を永年使用に供するにはマイクロ化が欠かせない。国立国会図書館憲政資料室、外務省外交史料館、防衛庁戦史室、東大社会科学研究所蔵資料などマイクロフィルムから焼き付けた写真資料が歴史研究に一般化し始めた戦後とは、大阪万国博覧会が開催された昭和四十五（EXPO 七〇）年ころをいう。外務省本省に残された耐爆倉庫に置かれた外交史料室には大型据付写真機から現像機までそろっており、撮影技術をマスターした職員がせっせと操作していた。

当時から中央官公庁機関の信頼を集め、その技術指導とサービスをしていた民間人が森松幹雄。森松家は江戸時代以前より福岡県八女の家柄であるが、森松幹雄は神戸にて昭和五（一九三〇）年に生誕し戦中を過ごし戦後上京した。

上京後 昭和二十五（一九五〇）年よりマイクロフィルムの先行企業日本マイクロ写真（株）に勤続して昭和三十七（一九六二）年独立して（株）国際マイクロ写真工業社を創業した人物。

独立後、貴重な記録資料のマイクロ化に意欲的に取り組んでいたころ、森松は外交史料館に足しげく通ってくる崔書勉を知る。資料複写の様々な注文を円滑に対応してゆく。平成十三年森松幹雄は脳梗塞を患い他界。父親の背中を見つめて育った義喬は風貌も挙措も亡父とそっくりだ。崔院長は世話になった仕事をまるまるムスコ社長に依頼しており良き関係はいまに続く。現在アナログからデジタルまで広範囲に仕事を拡張し、日本一の撮影技術力を誇る会社を目標として「記録資料の保存と活用」による社会貢献を成し遂げようとしている。

安重根の遺骨調査、旅順での手伝いやそのデータ整理など、安重根関連にかかわる作業に関しては崔院長から料金を一切受け取らずに無償の精神を貫いているようである。日韓談話室の一員である。

#### 研究院の目的と安重根

狸穴時代、二十畳ほどの広い院長室中央部に、朝鮮虎が四股を踏んでいた。入室者にはぎよっとさせられる虎の目に射すくめられ、その裏側に巨軀をでんと構えた崔書勉が座っていた。新居となった三田の研究院で崔院長は祖国に對して敬虔な気持ちをより強く持ち、人間としても奥行きを深さを際立たせていたように思う。学者である本領とナシヨナリストである精悍さをさらに磨いたのは三田時代だった。自分史に志士的な要素を刻みつけている崔書勉は、ここでは、広々とした応接室で来客と応対し、研究を志して集まる学者らには宝庫といつていい書庫に案内した。日韓関係史に興味を抱く人々は膨大な資料の中に目指す対象を見つけ出して歓喜に震え、そこから新たな発想を得て論文を書いたりしたものだ。

たとえばフリーランス・ライターだった木原悦子は神津島に伝わる“おたあ・ジュリア”という朝鮮貴族の娘について作品を書くため島に渡ったとき、島まつりともいおうか、「ジュリア祭」というミサ聖祭に参加した。キリシ

タンゴ禁制の日本に來たのは文祿・慶長の役にあたつて日本軍の捕虜となつたからだ、家康の世になつてから神津島に遠島となつて没している。招待席に迷ひ込んだ木原のそばに韓国語を駆使する崔書勉が座つていた。隣の人物は韓国外交官だつたが、「席を移りますからどうぞ、この方と」とすすめられ、何者とも知れず、木原は面談の好機をつかむ。

崔書勉こそ“おたあ”を発掘した本人であり、その功績によつて神津島が感謝状を贈つた人物だつた。

「そうですか、貴女もお調べですか。わたしが雑誌に発表した論文があります。一部差し上げましょう」

数日後木原の自宅に一九七三年東京韓国研究院発行の学術誌「韓」五号（通卷十七号）が送られてきた。論文寄贈者は「文祿・慶長の役は今日でも韓国人が対日不信感を抱く遠因のひとつになつてゐる」と記しており、木原は四百年前にさかのぼる豊臣秀吉の朝鮮征伐（七年戦役）が隣国に及ぼした傷の深さに目を開いた。彼女の処女作品となつた“おたあ・ジュリア”はこうして誕生している。

研究院理事長木内信胤の書いたものに「崔さんのプロフィール」という小文がある。文中このような記述を読んで、私は私なりに納得したので披露しておきたい。

「彼は二十万点に及ぶ資料の整理に、日夜忙殺されているかのごとくである。彼は資料の蒐集整理ばかりやつていたわけではない。韓国はいぜんとして混沌。彼は何をやってきたのか、私は知らない。朴正熙大統領とは大変親密であつたように思われているが、それは、韓国研究院の業績を知つた大統領が、進んで補助金を給与するにいたつたことを見て、世間が持つた感覚に過ぎない」

崔院長をめぐつて「影の駐日韓国大使」「怪物」「体制派実力者」など悪口めいて喧伝するやからが多いのは、木内が指摘しているように「下司のかんぐり」を好む卑しい人種の口から出たものだと考えてよい。初対面の折、苦勞して日本で暮らし、日韓関係の眞の改善のために歴史資料を収集・分析し、常に正道を歩んできた崔書勉の努力に大統領は「感謝します」と素直に敬意を表している。海外で自国の文化に光を当て、正統な関係樹立に私利私欲を忘れて

取り組んできた崔の人となりに関眼し、韓国文化海外振興の面で政府として相乗りしようという決め、国家予算に組み入れて東京韓国研究院を支えたのであつたろう。潤沢な資金が寄せられてきたからといって、むやみに崔書勉と朴正熙をいっしょくたに混ぜ合わせ、崔を権力者まがいに仕立てて喜ぶ、あるいは批判するのは場違いというものだ。

韓国研究院の定款に記された目的はその三条に詳しい。

「研究院は韓国に関する政治・経済・社会・文化および歴史の基礎的かつ総合的な調査研究を行うとともに、その成果を保管・普及し、もつて韓国についての適正な理解と国際協力および文化交流の促進に、寄与することを目的とする」

学識経験者は第二次世界大戦後もつとも近いはずの韓国が最も遠い国であることを文化交流、学术交流の薄さに見つめ、改善を求めていた。別の表現を使えば、韓国研究に着手する上でいちばん賢明な方法はなにか、回答を求めていた。日韓正常化が果たされていないため、韓国事情が分からない。つまり学識者らによる個別問題の解説を施せという日常情報の不足に知的飢餓状況の克服。日本研究に來日した外国人が、韓国研究を欠かせないと知ったとき、適切な学術援助を与えるにはどうするべきか。主に三点にわたる問題提起が韓国研究院設立の動機だった。崔書勉はどのように総括する。

だからこそ、「韓」という名称の学術季刊誌が研究活動の主体性を帯びて発刊され、六九年から八七年まで通巻一〇八号を数えたのである。執筆者は内外の韓国学研究者であつて、崔書勉はこの雑誌を私せず、全体で僅か四〇五回しか書いていない。編集委員会の自主性を尊び、口出しをしなかった。

その中で八〇年所管の通巻九十五号に出てくる「日本人が見た安重根」という安生誕百年記念寄稿こそ実は崔書勉が人生を通じてもつとも精魂を傾けてきた安重根研究の深さを物語る。七九年というこの年は朴大統領が命を奪われた年であり、また崔書勉の魂が一次的だが、道しるべとてない闇夜に、浮遊した年に当たる。この際、個人が抱く情を離れて、科学的に覚めた目で、安重根に取り組んできた研究ぶりを追ってみよう。



まだ一九六〇年代の後半であったろうか、弁護士鹿野琢見は旅順刑務所（中国・大連）に勤務した千葉十七が処刑五分前に安重根から揮毫を贈られたと韓国の新聞に紹介した。揮毫は「為国献身軍人本分 庚戌三月 於旅順獄中大韓国人 安重根謹拜」（くにのために身を献じるは軍人の本分なり）とあり、記事は大々的に扱われた。元陸軍憲兵曹長千葉十七は明治四十三（一九一〇）年三月二十六日死刑執行の日まで看守隊長であった。遺墨の持ち主は三浦幸喜・くに子夫妻だった。

「生前の叔父は安重根は単なる殺人犯ではない。いずれの日にか、韓国が独立したあかつきには忠臣として再評価されるでしょうと遺言して亡くなりました。実子のいない叔父から私が遺墨を引き継ぎ、その遺言どうり長いこと仏壇に収め、人目を避けて供養してきましたが、世の中が変わり、晴れて故国へ帰られることになって、うれしい……」

崔書勉にいったん寄贈した折の研究院における贈呈式で彼女は身をよじった。遺墨は韓国陸軍士官学校へ寄贈された。

早速鹿野は崔書勉の来訪を受ける。昭和五十四（一九七九）年、三浦夫妻の叔父だった千葉十七の郷里宮城県栗原郡若柳町にある菩提寺、大林寺に安重根碑を建立し、揮毫は韓国に寄贈すると決まった。二年後記念碑は完成し、さらに二年後の八三年、揮毫がソウルに戻った。建立式に崔書勉は朝鮮服に身を固め威儀を正して出席した。

当時、旅順監獄で通訳官を務めていた園木未喜も安重根の遺墨を貰っており、現物は娘の園木淑子から崔書勉に贈られている。向かって右手肩に…贈園木先生、中央に…日韓交誼善作紹介、そして左掌の拓本が左下隅に印されている。

また処刑に立ち会った栗原貞吉典獄の三女、今井房子は崔書勉の取材を受け、語った内容がテープに録音されて研究院の資料となっている。彼女も安重根生誕百年集会に招かれて挨拶した。

「あのころ私は小学生でしたが、父から家で安重根さんのことをたびたび聞かされました。

父は「あの男は殺人犯ではあるが、処刑するには惜しい立派な人物だよ」と口癖のように話していました。処刑の時

刻が迫り、父は頼まれて羽二重の韓国服を安さんに差し上げました。父は「誠に申し訳ない」と謝ったということでございます。官舎へは毎日のように多くの韓国人が助命嘆願にみえて、泣いていたのを覚えていいます」と。

朝日新聞で長年警察記者として鳴らしたジャーナリスト鈴木卓郎は七三年十月、港区内の韓国料理店で崔書勉と知り合った。金大中が拉致された夏から二ヶ月余であり、彼の新聞も日本の主権に対する韓国の侵害と論陣を張ったものだ。前に記した李秉禧第一無任所長官が事態解決のため来日し、マスコミの意見を聞きたいと述べ、崔書勉が数人を集めた。そのなかにいた雑誌編集長が鈴木を伴っていた。崔は彼らジャーナリストにこう言った。

「日本は韓国の主権を三十数年に亘って奪ったではありませんか。日本人は他国に主権があることをごぞんじでしたか」

そう問いかけた。

鈴木は一本取られたと思った。韓国人の心を知り、帰宅してから日記に「この日は韓国に対する意識変革の日」と記す。その後たびたび会合を持つようになるのだが、鈴木は「安重根という人をごぞんじか」と聞かれたことを思い出す。彼は明治の元勳伊藤博文を銃殺した犯人という程度の知識しか持ち合わせていなかった。金大中事件は金鐘泌國務総理が来日して謝罪し片を付けたが、翌年発生した陸英修暗殺事件では日本が謝罪する側に立つほかなかった。このあたりで鈴木は朝鮮総督府時代の日韓関係史の検証に夢中になる。

#### 崔書勉の研究法

八二年八月十日の参院文教委員会。秦野章議員（後の法相）が小川平二文相に質問した。

「韓国にとって伊藤博文を暗殺した安重根が英雄なのは当然であり、日本にとっては伊藤博文は偉大な政治家である。これは矛盾するものではなく、そこまで踏み込まないと、国と国との友好は進まない」

秦野は質問が終わったあと鈴木卓郎に次のような説明を加えた。

「まだ日本では安重根という歴史上の重要人物を知らない政治家、役人、新聞記者が多いので一人でも多く安重根を知ってもらいたくて質問の形で紹介した」

鈴木に言わせると、日本憲政史上国会の速記録に安重根の名前が乗ったのはこれが初めてだそうだ。

安重根がハルビン駅頭で伊藤公を銃殺したのは一九〇九年十月二十六日午前十時。桂太郎内閣はその年の七月六日閣議で韓国併合条約を正式に決めている。

「一九〇五年のこと。乙巳新条約（日露戦争後、日本が朝鮮に強要したいわゆる保護条約）が締結され、大韓の独立権は失われて、日本の保護国となった」

この言葉は自叙伝白凡逸志に金九が書き記した文章だが、金昌洙と名乗っていた青年期の日本軍人殺害事件前後、安重根の父親・安進士と親しく交わっている。二人の関係についてはすでに紹介済みだが、詳述すると、東学党で暴れまわり、敗北した金九が、嫌っていた敵の將軍の下に行けという目上の言を容れて、私淑したのが安進士だった。安重根は黄海道千峰山を越えた清溪洞の邸宅で育った子息である。

そのころ安重根は十三歳。ちよんまげを結び、頭を紫の布できっちりしぼり、トムパン銃という短銃をかついで毎日狩猟に過ごし、元氣いっぱいだった。清溪洞兵士の中でも射撃術は抜群で、獣でも鳥でも狙った獲物は逃したことがなかったという。

「安重根ほど知られていない有名な人物はいない」

崔書勉はしきりに話す。

「例えばね、安重根の身長がいくらで、収監されていた獄舎の部屋の番号が何番であったか、答えられる韓国学者はほとんどいないよ。総論は述べるけれど、各論にはとても弱い」

研究方法についても崔書勉は一家言を持つ。

「欧米や日本の学者はある特定人物について基本的な研究から始めるが、韓国の学者は原資料もなしに安重根については平気で書き、日本人研究者はひとつの原資料を見るとそれを十倍に増やしてしまい、研究があらゆる方向に行ってしまうくらいがある。日本では安重根伝が十冊ほど出ているが、正しい書物を見つけないのは難しい」

実証派の崔書勉は国立国会図書館で、一九〇九年十月から一〇年四月まであらゆる新聞、雑誌の中に安の関係資料を求めて読み漁った。探せばあるものである。日本人記者が報道した電報の中に「安重根義士が亡くなった日、ソウル明洞聖堂でミサが挙げられた」という記事を見つかる。

研究者のバイブルとされる引用本に満州日日新聞社が出版した「安重根公判記録」があるが、信憑性は薄いと崔は指摘する。なぜならば、裁判に当たって安重根が陳述したさまざまな説明を通訳する通訳官の翻訳があまりに短く、そのことを安重根が、「裁判長も弁護士も検事も日本人なのに、私の言葉を全部通訳しないで進めるこの裁判は“シヨ”にすぎないではないか」と発言しているからである。

「公判中のこの発言から推理すると、公判記録に書かれていない部分が多いということになります。さらに彼は自分が殺した伊藤を伊藤さまと必ず尊称をつけて話していたが、朝日新聞はわが伊藤公に対して“伊藤、伊藤”と呼び捨てだ、と嘘を書いた」

こうして崔は韓国人学者が下した「狭量なる天主教」という説をも、仏人ウイルヘルム神父に四回会い、告解聖事、聖体聖事をし、天主教がこれを受け入れた事実を、満州日日新聞、大阪朝日新聞など六の紙上に見つけて、訂正している。ある日日本で講演する前のこと、伊藤博文の孫という人物から「私みたいなものでも参加できるのか」と電話がかかってきたそうだ。崔書勉はこう答えた。

「伊藤公の息子さんは三人います。長男は駐韓公使、外相を歴任した井上馨の甥を養子に迎えている。二男は隠し子で文吉という。三男が真吉といいソウルで父親と一緒に暮らしていた。三男の息子であれば大歓迎ですよ」

「あなたは韓国人なのだか、日本人なのか分からなくなった。どうしてわが家のことにそれほど詳しいのか」

大いに感心したそうだ。

伊藤博文射殺犯を裁く旅順の法院当局は、殺人の正当性を披露する場を安重根に与えたようなものであり困惑したと、まず崔書勉は彼としての視点をここに置く。安重根は論点を日本国民と天皇との関係に立って、日清、日露両戦役に当たって明治天皇が發布した宣戦の詔勅を重視した、と説く。日清戦争開始前首相は伊藤博文だった。天皇が開戦に乗り気でなかったと感じていた。東学党の乱を鎮圧するため清国が朝鮮に軍隊を派遣し、日本も陸奥宗光の意向を入れて若干名の軍隊を駐留させることに明治帝は同意したが、清に主たる動きをさせ、わが国は従の立場から逸脱しないよう求めた。また土方久元首相が伊勢神宮と孝明天皇陵に奉告する勅使人選で伺いを立てると、「其の儀に及ばず、今回の戦争は朕もとより不本意なり」と退けた。

いやいやながらの開戦であったが、明治天皇は詔勅で、「朕ここに清国に対して戦を宣す」とし、国際法に反しない範囲で一切の手段を尽くせ、と明快に述べた。

天皇から厚い信頼を受けていた伊藤公であるのに“天皇の聖旨に反し、策略と脅迫をもって韓国を保全するどころか、逆に保護国とした”と旅順獄中記「東洋平和論」を引用し、法廷で陳述した安重根の闘争を崔書勉は安重根研究の土台に据える。崔の調べによれば、明治天皇は世界平和の確立と朝鮮の独立保全を日露戦争開始の詔勅で明らかにしていたことになる。

結果として、論理的には伊藤公を天皇の叛臣と見る思想経路をたどる。天皇を欺いた男である。国民の意思にも反した政治家である。東洋の平和を害する天下の罪人である……。

「私はその伊藤公を誅したのであり、私の行為は正当である」(安重根)

このように単独犯安が主張したからこそ、一九一〇年二月、旅順における安重根裁判は彼の正当性を立証する場になった。崔書勉は前提として安重根のこうした姿勢を詰めて行き、「安重根に罪の意識はなかった。正義を実行した自負を身につけ浩然とした態度を貫いた」との信念自体に崔自身の事件に対する立場を固めたのだった。

テロでなく義挙

鈴木貫太郎内閣の書記官長を務めた迫水久常は「終戦の詔勅」をまとめるに当たって中野正剛に添削の労を負ってもらったが、正剛の息子中野泰雄、細亜大教授は安重根研究に当たって崔書勉の指導と助言を受けた。父の近代政治史の中身と己自身の見解が、伊藤博文を告発する安重根の見解と重なりあうことを知って、「歴史と審判…安重根と伊藤博文」を亜細亜大学「経済学紀要」に発表した。

自分のゼミを聴講していた学生呉忠根が申し出た。

「是非とも先生が知っておかなければならない人がいます」

東京韓国研究院の存在を一生徒が中野に教えた。中野は早速崔書勉を訪ねた。崔は中野論文を読んでいた。ひとつうり話を交わしたとき、中野は崔についてこう考えた。

「崔書勉は千里の馬を得るために馬の骨を買う名伯楽である」

中野は瞠目したのである。憲兵千葉十七の甥である弁護士鹿野琢見を紹介され、安義士記念館から招請があったとき中野は鹿野、崔、鈴木卓郎とソウルに行き「韓国民の安重根への思いが日露戦争以来の日本帝国主義への記憶と結びついていることを了解し始めた」。

中野の労作「安重根―日韓関係の原像」は崔書勉の協力を得て発行され、韓国においても翻訳版が二万五千部出ている。福沢諭吉の脱亜論、安重根未完の論文・東洋平和、明治二十六年三月十八日上海で暗殺された金玉均の未だに遂げられていない顕彰…と、崔書勉の研究はこうした学徒を鼓舞し優れた果实を生み出していくのだった。

ちなみに中野正剛は朝日新聞社政治記者として頭角をあらわしたころ、桂内閣打倒の憲政擁護運動にのめりこんでならまれ、京城（ソウル）特派員に飛ばされた。泰雄の長兄克明はソウル生まれである。

時系列で犯行前後の動きを復習してみよう。

事件より六ヶ月前の一九〇九年三月二十一日、小村寿太郎外相と桂太郎首相は対韓保護政治を打ち切り、韓国を日本に併合することを立案、東京・靈南坂の伊藤博文官舎を訪ねた。伊藤は積極的に同意を与えている。憲政党（旧自由党）を基盤に政友会を結成し、第四次内閣まで主宰した伊藤は、朝鮮を保護国として統監に就任した後も含めて三度、枢密院議長を務めた。

桂・小村案に承諾を与えた後の四月十日、統監辞任の挨拶を韓国皇帝に為したとき、伊藤は併合のへの字にも触れていない。

「保護政策の実を挙げ立派な独立国に戻るよう祈ります」

むしろ白々しい挨拶を述べている。騙しおうせた伊藤は満州視察とハルピンでココフツェフ・ロシア大蔵大臣と会谈する目的で旅に出る。ウラジオストックを列車で発った一行はボクラチニヤ經由西に進み、黒龍江（アムール川）東岸のハルピン（哈爾濱）駅に十月二十六日午前滑り込んだ。目的は当地まで出迎えたロシア大蔵大臣との面談であった。安重根は既に潜入しており、プラットフォーム東側駅舎（停車場）の北側から二本目に立つ瓦斯塔前付近、ちよどロシア軍隊儀仗兵列東端背後にいたようだ。筆者の大伯父石光真清陸軍大尉がハルピンを根城に諜報活動を展開していたころから八年を過ぎていた。

川上俊彦ハルピン駐在日本総領事、ロシア大蔵大臣に先導され後部客車から降り立った伊藤公爵は閱兵しつつ中央に戻る形で東に移動した。出迎えの南端に日本代表者、中央に向かって露国官憲、諸外国代表、清国軍隊、露国本部軍隊、日本人居留民会と並んでいる。

伊藤は歩度を緩め駅舎に向かって斜め右に方向を変えた。目前に並ぶ歓迎陣に接近し、清国軍隊と触れ合うようにしていったん西側へ円を描くようにもとの位置に戻り停車場建物に向かうとき、銃声が鳴った。八の字髭、丸帽をかぶり、ダブルの八つボタンコートで白襟まできつちりと着込んだ朝鮮人が真正面からピストルを連射した。伊藤は倒れた。短銃から発せられた弾丸は四発である。伊藤の面識がなかった安はさらに三発を別の集団に向けて発砲した。

「伊藤公は安重根の短銃で殺されたのではない。ロシア側の同時発砲によるものだ」（富田義文）という異説に対して、韓国研究院の崔院長は二度にわたった現地調査も加え、次のように考察している。

「安重根は直ちにロシアの警備隊員によつて逮捕された。その転瞬、彼はウラー・コレアと韓国バンザイを三唱した。憲兵屯所に連行されていく間革命歌を歌っていたというロシア新聞の報道もある。一発ははねて別の角度から飛んだと思われる。ロシアが発砲した事実は立証できない。彼は逃亡の意思など全くなく、公判廷で真実を吐露する決意だった」

「さらに倉知鉄吉外務省政務局長は事件後一ヶ月も旅順に滞在し、伊藤博文暗殺事件が民族間の対立からではなく、あくまで一個人によるテロ行為で殺されたとし、事件の本質を矮小化することに意を尽した。倉知自身が「韓国併合の経緯」に書いていることである。安重根事件が韓国併合を促進せしめたという論は誤りだ。伊藤は併合に向かって着々と手を打っていた」

併合という目標をあくまで秘めておき、一挙に公表する道を探ったのが日本政府。崔はこのように考えていく。

逮捕後安重根はハルピンの日本総領事館で取調べを受けた。韓国併合前の保護国時代、日本は関東都督府を行政執行体として置いていたが、韓国人が外国で犯罪を犯した場合の取り扱いについて日本政府と統監府との間で結んだ司法協定によれば、現地領事館で領事裁判を行い、控訴審は長崎控訴院（高裁）で、とっていた。海外における韓国人の犯罪も日本人と同じに扱うという意味であり、小村寿太郎外相は満州も含む旅順の関東都督府法院にもつていった。関東州は日露戦争中、乃木希典とステッセル將軍の休戦会議によつて日本の租借となつてゐる。当地は日本外務大臣の所管であり最終責任者は小村外相となる。関東都督府法院で裁判するとの決定は安重根を旅順監獄に移送することを意味した。旅順・大連は満州と中国本土に進出する日本の拠点として、日露戦役後、ロシアが持っていた租借権の委譲を受け、日本が開発と建設に努めた場所である。中国東北地方の金州半島の岬角にあり、天然の良質な軍港を形成し、波穏やかな景勝地でもある。



一九〇九年十一月一日午前十一時二十五分、憲兵十人、警察官十六人に護送され、安重根はハルピンを離れた。旅順監獄に収容されたのは十一月三日。処刑執行の一九一〇（明治四十三）年三月二十六日まで四ヶ月余の百四十三日間を過ごす。

当時の旅順監獄人的構成は典獄（刑務所長）栗原貞吉、監吏（看守長）研野熊次郎、中村三千蔵、穴沢貞藤、町田総次郎、松角常太郎、加藤清太郎、大森貞吉からなっていた。加えて一般看守六十一人が勤務した。総勢九十人だった。法院に通う間も、死刑宣告後も嚴重な警備を必要とし、憲兵が看守役に狩り出されたりした。

崔書勉の調べによると、韓国在の統監府は境嘉明警視を旅順に派遣して背景調査に当たらせた。取り調べるうちに境は安重根が特異な人格の持ち主であることに驚く。彼の人柄を知る手段として獄中において自叙伝を書くことを薦め、檢察もその執筆を許可した。純漢文で十二月十三日から書き始め、翌年三月十五日に脱稿した自叙伝に安重根は“安應七歴史”と名づけている。胸に七つの黒子（ほくろ）があったためとされている。

韓国に來ている日本人は極悪非道、同じ日本人なのに旅順に來ている日本人はなぜにこのようにいつくしみ深くて手厚いのか……と安重根は驚きを綴っている。境についても実に好意的描写と好感に満ちている。

「韓国語がとても上手で、日々ともに談話した。日本、韓国人が意見をやりとりしても、その実、政見は互いに大きく異なるが、個人の人情でいえば、段々近づいてお互いに親密な昔の友人と違うことがなかった」  
監獄の幹部についても人間的な歎びを十二分に表わしている。

「栗原典獄と中村看守長はいつも私を保護して特に手厚く待遇した。毎週一回風呂を使わせてくれたし、毎日午前と午後の二回、監房から事務室に連れ出して各国の上等な紙巻タバコとケーキとお茶で手厚くもてなしてくれたため、満腹になることもあった。三度の食事には上等な白米が与えられ、上等なシャツを着替えに供してくれた。綿の掛け布団を四枚も特別に供給してくれた。みかん、りんご、梨などの果物を毎日二、三個与えてくれ、牛乳も一日一瓶が提供された。これは園木通訳が特別にくれたものであり、溝淵檢察官も鶏とタバコを差し入れてくれた……」

一切拷問を受けることなく思索に、揮毫に十分な時間を割り振れた獄中生活で安重根は東洋平和論の執筆にとりかかる。平石高等法院長が平和論を書くため死刑執行を一ヶ月延期できると言ったため、安重根は控訴を放棄して執筆に没頭したのだった。また揮毫とは、彼が余りに素晴らしい筆致で漢字を書くことから、司法関係者が絹布と紙をたくさん持ち込んだため、希望に添って進呈した果実そのものであった。

自分の骨はどこに埋葬されるべきか、安重根は年末に開かれた第十二回尋問に当たって境警視にハルピンと告げている。祖国に埋葬すべきでなく、願わくは遺骨は業爲った伊藤博文殺害現場にと希望した安重根の願いを発掘したのも崔書勉が取り組んだ研究成果の一つであろう。韓国を占領した伊藤博文に対抗して各地に義軍を興し苦戦奮闘の末ハルピンで勝利を得た事実、韓国独立を見ないうちは故国の地を踏まないとの決意…、これらが遺骨を満州の地に埋め、祖国に主権が回復したあかつきに故国に返葬せよとの願いに結晶した。

ハルピン駅プラットフォームには「伊藤博文公遭難地点」を示す標識がはめ込み式記念盤としていまに存在し、日本人会館内部には新海竹太郎謹製の伊藤公青銅銅像があることを崔書勉は現地調査で確認している。「往来する人は遭難地点に立てられた銅像に頭を下げさせられた」という韓国で有力だった説は誤伝である。崔は堂々と訂正できたのだった。

#### 遺体は未発見

問題は遺体の行方である。第二次世界大戦に日本が敗北した日、旅順刑務所では保管資料を焼却した。四九年华人民共和国による刑務所管理が始まり、残された乏しい史料は散逸した。崔書勉は外交史料館、法務省法務図書館蔵書史料から基本情報を探り、他の資料で補完しながら元宝村にあった旧大島町の旅順刑務所について成り立ちを固める一方、今津弘元朝日新聞社論説副主幹と本人を責任者とする安重根伝記編纂委員会を発足させ、安重根に関する正史編纂に乗り出す。同時に安重根義士墓域推定委員会を設け、処刑後埋葬された場所の特定作業を進めた。

旅順監獄址は中国政府が指定した文化財保護区にあり、満州経営時代の対日闘争を周知するため、社会教育場として活用されている。二〇一〇年に二〇三高地、水師營など日露戦争関係史跡を含め観光客に開放されるようになり、大連は新たな観光資源として世界的に売り出され始めたところだ。近代増築などにより刑務所の規模など大違いだそうだが、ブルドーザーでならずなど地上工事が加えられたりして、埋葬地が判然としない。

崔の研究は死刑そのものに絞り込まれた。関東都督府は安重根の強い望みから凶行地への埋葬を図るであろうと考え、民政長官名で遺体を遺族に渡さないと決定した。極悪犯を英雄化するような事態は日本として断固阻止しなければならぬ重大事であった。崔は日本における研究の助手を務めてきた長井泰治に関東都督府の関係資料を探るよう依頼した。長井の祖父加藤増雄駐韓全權公使は三浦悟朗の後任として閔妃虐殺事件の事後処理に当たった人物であり、長井は日頃祖父の研究に没頭している。

安自身は自分が処刑されるべき日を二〇一〇年三月二十五日、つまりイエス・キリスト受難の日と定め、典獄や旅順民政署長（警察署長）にその旨上申し、これに合わせて安定根、恭根の弟二人が鮫島町一丁目十六番地の貴豊客棧に旅装を解き、遺体引き取りなどの準備に入った。二十五日はしかし李王朝高宗の誕生日「乾元節」当日であり、国際的にも死刑執行など不吉な執行は日を変えて実施する習いである。死刑執行日は翌二十六日に変わった。

安重根の兄弟は警察力によって旅館に閉じ込められ、当日午前十時（伊藤公死亡時間）に刑死が確認された後、典獄の呼び出しを受けた。栗原貞吉典獄は監獄法七四条と政府の命令によって遺体は渡せないと二人に通告した。

「しかし遺体に礼拝することを許す」

栗原に対して兄弟は激しく反論し、怒りを吐露した。

「監獄法七四条は死亡者の親族、故旧にして死体または遺骨を請う者あるときは、いつにてもこれを交付することを得、としている。すなわち遺体を引き渡すという意味である。死刑の目的は被告の人命を断つことによつて終わる。その死体は当然遺族に渡されなければならない」

抵抗する二人をもてあました官憲は強制的に馱まで送り出し、刑事二人を護衛に貼り付け、午後五時大連行き列車に乗せて兄弟を帰国させた。これら経緯は全て崔書勉が発掘した旅順民政長官が三月二十六日に記した安重根死刑後報告書に盛り込まれている。遺体引き渡し拒否は明らかに日本官憲が犯した国法違反事例である。

崔は安重根の自叙伝「安應七歴史」を発見入手し、東京韓国研究院名で公開した。死の直前まで安重根が享受できた人間的環境、人づくりを考える教育家であり、キリストを大切にしている信仰者であり、優れた時局観と歴史観を持つ科学者だという新たな認識がこの自叙伝によって明らかになった。志の高い思想家という面は安重根に新たな照明を注ぐ契機となり、日韓両国で安重根研究が大きく進んだのだった。東京韓国研究院に寄贈された安重根の遺墨はその都度、ソウルの安重根義士記念館に展示されるようになった。また市川正明青森大教授は未完の東洋平和論の序説部分を発見し、研究はさらに高められた。

安の自叙伝によれば、明治天皇の戦争の詔勅とは日露戦争開戦のものを指している。原文を分かりやすく拾ってこう。

日露開戦のとき、日本が宣戦書中、東洋の大義を掲げ、東洋平和の維持と韓国独立を強固にするとありながら、いま日本はその大義を守らず、野心的侵略をほしのままにし、日本の大政治家伊藤博文は自らその功をたのみ、みだりに尊大、傍若無人のように驕はなはだしく、悪きわまり、君をあざむき世界の信義を捨て去った。これいわゆる天にさからうというべく、(中略)いま韓国の形勢危なること、祖国の亡びること朝夕にあり。

さらに、天皇を欺いて韓国民二千万人が日本の保護を受けるようになった現状を伊藤公の暴行とし、また列強をなすがしろにする異端的行為と決めつけた。この賊を倒さなければ韓国は必ず亡びてしまう、東洋自体がまさに存亡の危機に曝されると伊藤暗殺の事由を挙げている。

当初、安には十二人の仲間がいた。左手の薬指を切り取ってあふれでた血をもって太極旗に大韓独立と血書し、要人殺しを誓う。だが機会に恵まれなままたずらに時はたち、遂に独歩行を決意、ハルピンに伊藤が来ることを知

る。土地の義兵将から金を借りて当面の運動資金百元を確保した安はさらに別人から五十元を調達したが不安は募るばかりだった。二人の協力を取り付けたものの完全に信頼する相手ではなかった。

彼は午前七時洋服に着替え拳銃を携帯して停車場に行った。プラットフォームにはロシア軍人が多数来ており、安重根は売店の中に席を見つけ二三杯茶を喫して列車到着を待った。伊藤を乗せた列車が到着したのは午前九時ころだった。伊藤の顔を知らなかった安は、小柄な老人でひげを蓄え、ロシア官憲が護衛する人物に狙いを定めて短銃を抜き、四発射撃した。さらに人違いしてはなるまいと思ひ、前面の偉容最も重い先行者に向かってさらに三発を撃ち込んだのだった。伊藤以外に傷を負わせた行為を安は獄中記で詫びた。

崔書勉は語る。

「いまだに安重根の遺骨は発見されていない。執行後監獄の裏山に一人寝棺の形で埋葬され、その付近を写した写真一枚が遺骨探査の鍵となった。座棺形式でないという特徴は探査上の特質であろう。しかし実地での計測と現地勢との比較に一致点が出てこない。したがってどこに埋葬されたのかわからない。そもそも安重根の遺骸は故国に遷葬すべきだと公式に考えたのは大韓民国臨時政府主席金九でした。大戦直後南北協商を図ってピョンヤンを訪問中、金九は金日成にこのむね提議している。金日成は旅順が現在ソ連の租借地なのでソ連当局の許可が必要、直ちにといいわけにはいかない。南北統一後でもいいではないか、と答えたようだ。共産主義を唱えたことのない安重根を英雄として故国に遷葬するような民族主義的行事を行うことは当時のソ連軍政体制下では言いづらかったと想像される」

安重根の子ども安偶生はロシア語に堪能で金九の秘書を勤めていたが、金九は彼をピョンヤンに残し、安重根遺骸の故国返送作業について詰めを行うよう言い含めた。金日成はしばらくのち、安偶生を団長とする使節団を公式に中国に派遣している。安重根遺骸発掘を目的とした大連・旅順訪問団だったこと、北朝鮮で「安重根、伊藤博文を撃つ」という映画が完成したことなどから、金日成もまた安重根に高い評価を与えていたことがわかる。義士の出身地

が現在は北朝鮮に属する海州だったことも親近感を覚えた一つの事由だったろう。しかしこのとき行われた調査行で北朝鮮は「遺骸探しは不可能、確認できず」という結論を出している。

韓国では国家報勲処を中心に独立闘争功労者の発掘と顕彰が永年継続して行われている。

外国に埋葬されている愛国志士を故国に戻し、手厚く葬るばかりでなく勲章を授与して名誉を讃える運動だ。当然安重根を故国に迎える熱意、情熱と意義の再確認が韓国で火を噴いた。長井が調べ上げた資料に安重根関連の手がかりは見つかっていない、が、かつて国に貢献した朝鮮人の名簿は多数（二千六百人）発見され、報告を受けた報勲処は大いに感謝した。

国としても、崔書勉のように民間の学術的努力を注ぐ側にしても、韓国に関する限り、発掘不可能の字はないようである。南北共同に近い形で「安重根義士遺骸発掘推進団」の設置がきまり、崔書勉は二〇一〇年四月末、その「資料発掘委員会」委員長に就任した。たゆみなく発見への努力は継続されていくに相違ない。崔書勉が三次に亘って実施した調査による安重根の墓域は、推定だが、北緯三八度四九分三九秒、東経一二一度一五分四三秒である。